

当初は北米を中心に、自然の保護・保全状況に関する調査・研究を行う予定であったが、新型コロナウイルスの世界的な蔓延の問題から、海外での研究に取り組むことが困難な状況となってしまったため、「特例措置」により国内において、「日本の環境倫理の基盤としての自然・文化・宗教の研究」に取り組んだ。

日本の自然植生は、一般に、西日本に優勢の照葉樹林帯（常緑広葉樹林帯）と東日本に優勢のナラ林帯（落葉広葉樹林帯）に分類される。前者に特有の文化は中尾佐助によって「照葉樹林文化」と名づけられ、後者に特有の文化は佐々木高明によって「ナラ林文化」と名づけられた。

照葉樹林文化は、「東亜半月弧」と呼ばれる中国の雲南高地を中心に、西はインドのアッサムから東は湖南省にいたる半月地帯に起源を持ち、クズやワラビの根から水さらしによってデンプンを作る技術、モチの食文化、茶、桑を食べないカイコの利用、漆の利用、柑橘類やシソ類の栽培、麴による酒の醸造、納豆や味噌などの醗酵食品、ナレズシ、焼畑、歌垣、婚姻形態などを主要な要素とする文化複合 complex であるとされる。照葉樹林文化論は、西尾と佐々木の両者によって展開された文化人類学的理論であると言えるが、中尾と佐々木とは、照葉樹林文化の時代設定に大きな違いがある。

当初、中尾によって提起された照葉樹林文化は、世界の農耕文化の起源を、「根菜農耕文化」「サバンナ農耕文化」「地中海農耕文化」「新大陸農耕文化」の四系統に分け、東南アジアの熱帯降雨林地帯で成立した根菜農耕文化と、雑穀栽培を主とする西からのサバンナ農耕文化の影響を受けて、照葉樹林地帯の風土に応じて独自に発達した農耕文化の一亜種として捉えられていた。また、こうして成立した照葉樹林文化は、「純石器時代の採集経済の段階から、栽培農業、そしてたぶん青銅器使用の段階まで連続してきたが、鉄器時代に入るころには…死滅してしまった」とされ、今日この照葉樹林帯に見られる文化的要素は、「過去の文化遺産」だとされた。なお、こうして提起された初期の照葉樹林農耕文化論は、西日本の照葉樹林地帯を含むとはされていたが、関東以北のナラ林地帯との関係など、日本の自然環境に着目した立論は特に行われていなかった。

その後、中尾の照葉樹林文化論は、吉良竜夫らとの討論をへて、日本の状況に着目し、焼畑農耕の導入を境にして、それ以前の段階を「照葉樹林前期複合」と名づけ、焼畑導入以後を本格的な農耕文化がスタートした「照葉樹林文化複合」の時代であるとするようになる。前期複合の時代には、大陸から「ヤマノイモ、カジノキ、ヒガンバナ」などが導入され、半栽培的な状態で耕作・採集されて、水さらしの技術を用い、これらのデンプン質が食されていたとされる。焼畑導入時には、「ヒエ、ダイズ、アズキ、アワ、キビ、シコクビエ」などが導入され、ここから本格的な日本の農耕文化が始まったとされる。また中尾は、焼畑導入の時期を「縄文晩期」としている。

しかし中尾の照葉樹林文化論は、『続・照葉樹林文化』の段階で、大きく修正が試みられる。従来、中尾は照葉樹林文化を、根菜農耕文化と、雑穀栽培を主とするサバンナ農耕文化の影響を受けて成立したものであるとしていたが、この段階で中尾は、根菜農耕文化が照葉樹林文化に影響を与えたのではなく、根菜農耕文化は照葉樹林文化の影響により成立したものであるとし、さらにアジアの稲作農業の起源についても、インドの東部で始まったというそれまでの説を改め、照葉樹林地帯であると主張することになる。ただし中尾のこのような修正仮説は、佐々木からの強い批判を受け、十分な基礎づけがなされないまま議論が終わっている。

以上のような中尾の照葉樹林文化論に対し、佐々木は、特に照葉樹林文化の時代設定に関して異なった論点に立っている。佐々木は、照葉樹林文化を、採集・半栽培農耕の時代から雑穀栽培を主とした焼畑農耕の時代に限定し、「稲作文化は、その複雑な文化構成の内容からみて、照葉樹林文化の範疇で捉えることはできない」という理由から、水稻栽培の

時代を照葉樹林文化から切り離す。ただし照葉樹林文化の中心地域を「東亜半月弧」とすることには、両者の間に差異はない。また稲作の起源地についても、佐々木は、90年代に入ってから研究状況に基づき「長江中流域」とする説を支持し、この地域は東亜半月弧東縁の周辺部にあたることから、稲作文化の発達に照葉樹林地帯の民族が何らかの寄与をはたしていると推定することは可能であるとして、中尾が『続・照葉樹林文化』で提案した、稲作の発祥地を照葉樹林地帯とする仮説を完全に否定する立場をとってはいない。

本研究との関連において見ると、照葉樹林文化の時代と地域に関する認識の問題は、極めて重要な意味を持つ。なぜなら日本は、照葉樹林文化の中心地域からは大きく外れた東の地にあり、関東以北は、ナラ林地帯であるところから、それぞれの地域の自然環境や歴史的背景の差異、さらには相互の影響関係が複雑に入り組んでいると考えられるからである。今回の研究期間では、照葉樹林文化論で提示された文化的要素の代表的なものに関して、我が国でも西日本の照葉樹林地帯に特有のものであると断定し得るか否かを検討し、日本における照葉樹林文化の時代と地域を、特定するための調査と考察を行った。

中尾によれば、クズやワラビの根から水さらしによってデンプンを作る技術が、照葉樹林帯における初期の農耕文化複合の重要な要素としてあげられる。日本におけるクズやワラビの根の利用を見ると、一見、西日本に特有であるかのような印象を受けるが、クズ粉は岩手県でも生産されていたことがあり、ワラビ粉はかつて青森県、秋田県、岩手県でも多く生産されていたことが報告されている。もちろん東北地方のクズ粉やワラビ粉の生産技術が、西日本からもたらされたものである可能性は否定できないが、江戸時代の松前藩による蝦夷地（北海道）の調査に、アイヌ民族がカタコ（カタクリ）から「カクリ」という粉を作り、食していたとする記録が存在する。こうした点から、クズやワラビなどの根からデンプンを作って食料とすることが、照葉樹林帯に特有のものであると断定することには懸念が残った。また中尾は、クズやワラビの根からデンプンを作って食する文化を、「東南アジアの熱帯降雨林の中でおこった根菜農耕文化」に由来するものだとしているが、アイヌ民族に見られるカタクリの利用が倭人との関係なしに考えられ、ウバユリ属やカタクリ属の根茎類の利用が縄文時代前期にまで遡れるとすれば、根茎類のデンプン利用の起源に関する中尾仮説の信憑性は、大きくゆらぐことになると思量された。

一方で佐々木は、「焼畑」を照葉樹林帯に特有の生業形態としてあげているが、日本の焼畑はすでに縄文時代に、照葉樹林帯の西南日本だけではなく、ナラ林帯の上越・東北地方にもあったとされている。また焼畑はそもそも、比較的湿潤な照葉樹林帯よりも、乾燥したナラ林帯の方が適しているともされるところから、焼畑を、少なくとも日本の照葉樹林文化の主要構成要素とすることには難点があると思量された。なお焼畑農耕は、佐々木による照葉樹林文化論の核心でもあるところから、もし日本の焼畑農耕が照葉樹林文化に由来するものではないことが断定されれば、佐々木の照葉樹林文化論は根本的な見直しを迫られることにもなるだろう。

さらに中尾は、「茶」を照葉樹林帯における農耕文化複合の一要素としてあげている。茶は、中国雲南省付近が原産とされ、9世紀の始めに留学僧によって日本にもたらされたと言われ、日本への伝来を示す最古の資料は、『日本後記』に見られる弘仁6年（815）の4月に嵯峨天皇が近江韓埼へ行幸した際の記事であるとされている。茶樹はツバキ科ツバキ属の常緑樹であり、いわゆる照葉樹の一種であるとも見ることできるが、日本では自生するのではなく、帰化植物の栽培品種であるため、植物的特徴から茶を日本の照葉樹林の構成種とすることには難がある。むしろ日本の照葉樹林帯と茶の結びつきは、古代に中国との国家的な交流が可能であった政治・文化の中心が、照葉樹林帯の近畿地方にあったという歴史的経緯に起因するところが大きいと言えるだろう。ただし茶樹の栽培には、比較的温暖な気候が適しており、現在の経済的栽培の北限が、新潟県の村上市及び茨城県大子町

であるとされているところから、茶樹の栽培が関東以南の照葉樹林帯と重なることは事実である。従って「茶の湯」として完成する日本の茶文化は、近畿地方を中心とした宮廷や武家、堺の豪商らによる文化的背景に加え、照葉樹林帯の気候風土とも関連しつつ形成されたものであると見ることは可能である。

さらに中尾は、「納豆」の食文化を照葉樹林帯に特有の文化的要素としてあげている。中尾は、インドネシア・ジャワ島のテンペとヒマラヤのキネマと日本を結び「ナットウの大三角形」として、中国雲南省を起源とする納豆食文化の伝播に関する単一起源仮説を提起している。しかし横山智の徹底したフィールド調査により、中尾の単一起源仮説は現在ではほとんど信憑性を持たないものになっている。また日本で食されている納豆の種類を見てみると、中尾が日本の納豆との類似性を指摘した東南アジアやヒマラヤの納豆は、茹でた納豆を、塩を加えずに枯草菌などで醗酵させる「糸引き納豆」に属するもので、一部の例外はあるとしても、糸引き納豆は、照葉樹林帯の西日本では伝統的に好まれてこなかった食物である。糸引き納豆が伝統的に好まれて来た地域は、むしろナラ林帯の関東から東北地方であり、特に日本の照葉樹林文化について考えるなら、その代表的な文化的要素として「納豆」をあげることには大きな難があると思量された。

食文化以外の照葉樹林文化の特徴的な要素として、中尾は「歌垣」をあげている。「歌垣」とは、内田り子によれば、「成年に達した男女が山上或は部落の聖地等を集って、飲食・歌舞の後に性の解放を行う習俗」であると定義される。歌垣と照葉樹林文化との関係に関する議論は、西尾が『続・照葉樹林文化』で、ネパールの歌垣を紹介したことから始まる。西尾が紹介しているネパールの歌垣は、彼らがフィールド調査を行った当時の習俗であり、その歴史をどこまで遡れるかは不明である。一方で日本にも歌垣の風習があったことが知られており、文献上でたどることができる最も古い記録は、『古事記』（712年編纂）下巻の「清寧天皇」に係る記述である。しかし歌垣に関する記述は、『古事記』と同時代の『常陸国風土記』（713年編纂、721年成立）などにもあるところから、すでに古代の日本において歌垣の習俗は、畿内にとどまるものではなかったことが分かる。ただし東北地方に関する風土記は存在しないところから、古代の東北地方に歌垣の習俗があったか否かは定かではない。しかし内田によると、「三吉節（秋田県）定義節（宮城県）羽黒節、玄如節（福島県）などの民謡」には、これらの地方に歌垣の習俗が存在していたことを示唆する歌詞が含まれているとされているところから、少なくとも近世日本の東北地方には、歌垣の習俗があったと推測される。照葉樹林文化をどの時代の文化として捉えるかという大きな問題はあるが、歌垣に関しても、照葉樹林帯に特有の文化的要素と断定することには難があるのではないかと思量された。

ただし、アイヌ民族をナラ林文化を代表する民族の一つであるとして見ることができるなら、「アイヌ民族には兄妹始祖神話が無い」とされたり、「男は母と同じ下紐（貞操帯）の系統を持つ女とは結婚できない。すなわち、母の姉または妹、さらにその娘は、母と同じ下紐を持っており、そのような女性と結婚することは禁忌とされた」と言われたりしているところから、ナラ林文化には、性に関する一定の倫理観が潜在していた可能性が推定される。一方で、国生みの神話として、イザナギとイザナミによる兄妹神の性的交わりを描いたり（『古事記』上巻・二）、雄略天皇の精力旺盛な様を描写したりすることから始まり（『日本書記』巻十四）、あらん限りの性の放埒を綴った『源氏物語』に結実する日本古典文学が、照葉樹林帯の畿内で醸成されたことから見て、西日本には、北方のナラ林文化とは異なった性の観念があったと言えるかもしれない。ただしアイヌは文字を持たない民族であるため、畿内と比較して古代の様子を実際に知ることはできない。また日本古典文学の成立と発展の背景には、中国文学からの影響が多分に考えられ、中国にも『遊仙窟』を始めとして性の奔放を描いた作品は存在する。従って、性の観念をめぐってナラ林文化と照葉樹林文化

の差異を実証的に示すことは、実際には極めて難しいと言わざるをえないだろう。

照葉樹林文化論は、中尾によって提唱されて以来、支持・批判の両面で数多くの議論の的とされて来たが、佐々木によって提唱されたナラ林文化論は、照葉樹林文化論ほどには議論の対象となっていないように見受けられる。その理由の一つは、ナラ林文化の担い手の一角であるアイヌが文字を持たない民族だったため、近世以前のアイヌの実態が全く分からないことにあるが、それよりも大きな理由は、歴史時代以降の日本の政治的・文化的中心が照葉樹林帯の畿内であったため、時代が進行するに従って、ナラ林帯の東北地方も、一様に照葉樹林文化で塗りつぶされてしまったことにある、と思われる。その意味ではすでに日本文化の基底には、ナラ林文化の独自性は息づいていないと言えるのかもしれないが、素朴な肌感覚で言えば、奥羽山脈の山間地に伝わる習俗や生活習慣と、紀伊半島や九州の山間部におけるそれとの間には、明らかな違いが感じられる。半年間という今回の研究期間では、ナラ林文化の独自性につながる明確な手がかりを見出すことはできなかったが、今後もさらにこの方面の調査・研究を行い、ナラ林帯の自然環境と文化の本質的関連性を明らかにしたいと考えている。またそれと共に、照葉樹林帯とナラ林帯という我が国に見られる現実の自然植生を基盤とした、日本的環境倫理の構築に向けた思索の努力も重ねて行きたいと思っている。一方で今回の研究では、当職が担当する連環地域文化論や哲学関連科目において教材として利用可能な多くの情報・素材を入手することができたので、これらを積極的に教育にも活用していくつもりである。